

The expensive delicate ship

新訳源氏物語

佐藤 紘彰

かの大惨劇の九月十一日のあとニューヨークで開かれた詩の朗読会では、W. H. Auden の「一九三九年九月一日」(September 1, 1939) が頻繁に選ばれたそうである。オーデンが取り上げた日は、申すまでもなく、ヒトラーがポーランド侵略を始めた日で、第二次世界大戦が正式に始まった日とされるが、詩は、侵略のニュースをマンハッタンは五十二丁目の居酒屋で聞いた時のことを述べる。

しかし、黒煙を挙げ、火を噴く「双子のタワー」をアパートの屋上から眺め、ずぬけて明るい陽光の中を行き来する人たちを身近にしてほくが思い出したのは、オーデンの別の詩であった。ブリュッセルに行っている時に作った詩の一つ、Musée des Beaux Arts がそれだ。最終連でブリュッゲルの絵「イカルス」(「イカルスの墜落を持つ風景」とも)に焦点を当てた、苦しみ

(suffering) や惨劇(disaster)と、その周辺で続けられる日常生活の乖離を描く名作である。

この詩を若いともたちのために訳していて、はたと戸惑ったところがある。the expensive delicate ship という表現がそれだ。

結局、いつもの原文忠実主義で「高価で繊細な船」としたのだが、他の訳者はどうしているか。歌人の石井辰彦さんにEmailで尋ねると、「美術館」という中桐雅夫訳があつて、ここでは「ぜいたくで優美な船」とあるという(訳は一九九三年思潮社

刊沢崎順之助編『オーデン詩集』に収録されているとのこと)。ほくもそのような表現を考えたが、それなら原文は the luxurious elegant ship と、韻律的にも問題のない表現が可能はず、と結論した。翻訳は往々にしてそのような憶測と迷いで成り立っている

というのが導入部となるかどうか、『源氏物語』は日本文学の、まさに the expensive delicate ship と言つて差し支えないと思つ。今度、その第三の英訳が出た。訳者は Royall Tyler、出版元は Viking である。

『源氏物語』を最初に英訳した人は、ご存知 Arthur Waley 訳は一九二五年から一九三三年まで六巻にわけて出たと書誌にある。いま、そのように出版年を記してみても、ちよつとした疑問が湧く。角川文庫に収める與謝野晶子の『源氏物語』訳の上巻に池田亀鑑が「源氏物語と晶子源氏」というあとがきをつけ、「晶子夫人が源氏物語の現代語訳に着手せられたのは、明治の末年で、夫人が三十歳を少し越えられたころであつたらしい」とし、「その当時は湖月抄よりほかに適当な参考書はなかつたのであり、一通り全巻を通読するだけでも容易ならぬ仕事であつた」としているからだ。『湖月抄』は北村季吟が一六七三年に完成した注釈書という。これは一八九〇年には活字になつたらしいが、手持ちの『八代集抄』からすれば、その注釈は痒いところに手が届くところから程遠いと思われる。

とすれば、ウエイリーは、大正の末にどんな注釈書をもつて『源氏物語』に臨んだのだらうか。ウエイリーは、『紫式部日記』を序文に大きく取り入れ、脚注にその出版社として博文館を挙げていながら、肝心の物語のテキストに何を使つたかは記していない。「源氏物語・刊行書籍一覧」というウェブサイトで、同じ博文館のものを見ると、一九一六年、『校定源氏物語

詳解・5冊(花宴まで)』というのがあつたが、いま、その「詳解」がどの程度のものかは推定のすべがなく、それにまた、池田亀鑑は「当時」にそのころまでを含んでいるとも考えられる。「(日本の)古文は易しい文法と限られた語彙を持つから、それを習得するには三ヶ月あれば十分 since the classical language has an easy grammar and limited vocabulary, a few months should suffice for the mastering of it」と言い放つたことで名高いウエイリーにとつて、日本語は現代語も古語も等しく外国語であり、日本人のように古文は苦手というようなことはなかつたとしても、現在のように懇切丁寧な注釈書がなかつたとすれば、その源氏訳は偉業とせねばならない。「源氏物語は、日本人なら、誰にでも、すらすら読解せられなければならない」と言つ山岸徳平すら、「けれども、文章に色々の抵抗があつて、誰にも、すらすらとは、読解し難い」と言っている。これは、一九五八年、岩波の日本古典文学体系『源氏物語』校注全五巻のうち第一巻を終えた時の弁で、ウエイリーの訳から四半世紀たつている。いわゆる山岸源氏は、物語の中の発言者や発言の相手をテキスト内で示し、また会話や独語を括弧で括るなどして、原文の曖昧模糊としたところをそれだけ鮮明にしたことが特筆すべき点らしい。

第二の訳をしたのは Edward G. Seidensticker。この学者が有名な日本の古典の訳に取り組んでいるという記事が *The New York Times* に出て、それを読んだ時のことを、ほくは今でも覚

えているが、出版は一九七六年、ニューヨークの Knopf とロンドンの Secker and Warburg から時を同じくして目の目を見た。サイデンスティカーは、その序文で、テクストとして主に山岸源氏を使ったと言ひ、その他、玉上琢彌の評釈と当時出版の途次にあつた小学館の日本古典文学全集のものを、また、現代日本語への訳としては、與謝野晶子、谷崎潤一郎、田地文子のを参考にしたと言ひている。

そのサイデンスティカーは、先行するウエイリーの訳について、これは自分にとつて「日本文学への入門書 my introduction to Japanese literature」となつたものであつて、何度読み返したか分からない。偉大な文学作品の訳は多ければ多いほどよいが、そんなわけだから新たな訳をするのは「冒瀆 sacrilege」のやうな気がした。しかし、ウエイリーは第三十八章を一つ省略しているばかりでなく、他にも、非常に大胆に切り捨て排除した cuts and expunges very boldly」部分がある。逆に「増幅 amplify」し「潤色 embroider」を施す。それがいかほどかは、「大胆に縮小されたウエイリーの翻訳 boldly abridged Waley translation」よりも自分の完訳の方が総語数が少ないことから知られなう」と記す。この総語数うんぬんは、ほくが詩歌の訳でよく用いる考えなので、ここでは、以下、この尺度を使つてみようと思つ。

サイデンスティカーの発言で一つ注目されるのは、紫式部の文体についての言葉だろ。ウエイリー訳の「リズム」に比べるべし、紫式部のそれは「もっとチキパキとし、より寡黙であり、

言葉を経済的に用ひ、長々と説明することが少ない brisker and more laconic, more economical of words and less given to elaboration」と言つたのだ。ほくのちうに、高校の古文のクラスで、文体上『源氏物語』といへば『枕草子』と対比さるべきものと習つて以来、それを金科玉条と考へている者にとつて、これは驚きと映る。少なくとも戦中生まれのほくららの世代は、それに似た対比として、現代日本文学では谷崎潤一郎と川端康成があると教わり、それから英文学に進んだ人は William Faulkner と Ernest Hemingway が同じよつに對比されると学んだはずだ。それなのに、サイデンスティカーは紫式部の文体がチキパキしていると言ひ、トーンでもリズムでも自分の訳の方が紫式部に近いといつのである。

第三の英訳者タイラーは、その序文で、開口一番、もっと人を驚かすことを言つた。いわく、『源氏物語』は日本で千年前に書かれたが、こんにちでも誰もが読むことができる。注釈は役に立つが必要ではない。The Tale of Genji was written a thousand years ago in Japan, but anyone can read it today. The notes are useful but not required.

幸い、といつべきか、タイラーは序文の後の方で、The Language of Genji という項目を設けて冒頭の発言を大幅に修正している。いわく、「この物語の文体は論ずるまでもなく偉大な文学的成果だが、それはまた非常に難しいものでもある。The style of the tale is indisputably a great literary achievement, but it is

also difficult」云々)、「文章内で(名前)を出すこと」は稀であり、動詞が明示された主語を持つことはほとんどない。これまでに八百年の源氏研究がなされているが、依然、この言葉、あの行為を別人のものとするべきだと論ずることは可能である。Names are rare, and verbs seldom have a stated subject. After eight hundred years of *Genji* scholarship, it is still possible to argue that this or that speech or action should be attributed to someone else」云々しているのだ。

そして自分の訳については、原文の「淀みない流れ the evenness of flow」を英語で再現することはできないが、長い文章を維持することはできるし、婉曲語法を再現することもできるとする。ただし、タイラーは、新日本文学古典体系の『源氏物語』の校注者の一人となった藤井貞和などが唱え、アメリカの日本文学の中にも Richard Okada など共鳴者を持つ「物語における現在話法」の使用については、英語では適切でないと退ける(現在話法を英訳に移植することは是非については、一九九六年サイマル出版会刊拙著『訳せないもの』である程度述べたので参照いただきたい) と言いたいが、同著は出版社の倒産とともにゾッキ本になった)。

タイラーは、先行英訳の存在には触れるが、評価はくださない。以上、三つの訳を並べて体裁のみをみると、脚注は、ウエイリーとサイデンスティーカーに少なく、タイラーに多い(サイデー

ンステイカーは、出版社の要請で脚注を最低限にしたと記している)。挿し絵はサイデンスティーカーとタイラーにあり、タイラーは、更に、京都近辺の地図、都の平面図、物語で語られる出来事の年代的経過、用語集、衣類と色彩の説明、官職の説明、更には短いながら参考文献を掲げる。そうした点で、タイラーの訳は日本語の注釈書に近くなる。違いは、日本語の注釈書では解釈が頭注などに回されるのが、英語では訳になることだ。

さて、これまでぼくが訳した文章に添えた原文を見て、「佐藤の翻訳は何事か」と笑いだす人がいても不思議ではない。それは冒頭のオーデンの詞章の拙訳からも言えることに違いなく、だから、以下少しだけ比較のために引く源氏訳でも、ぼくは揚げ足をとるつもりは毛頭ない。サイデンスティーカーは、ニューヨークの講演で、英語を理解する日本の学者が自分の英訳を取り上げては細々ケチをつけると、苛立ちとも侮蔑ともつかぬものを表明したことがある。また、中公文庫に収める谷崎潤一郎訳第一巻の解説で、池田弥三郎が、冒頭の部分だけながら引いている谷崎の三種の訳からも分かる通り、訳は同じ人がやって、そのたびごとに変わる。日本古典詩歌の大家 Earl Miner 先生が、「詩の訳はその時の気分次第」とおっしゃったことがあるが、散文の場合は尚更そうである。

で、まず、その冒頭の部分を引いてみよう。この部分、ぼくらの世代は暗記させられたが、山岸源氏ではこうある。小文字

で入れてある主語その他の傍注は省く。

いじれの御時にか。女御・更衣あまたさぶらひ給ひける
なかに、いとちむことなき際にはあらぬが、すべれて時
めき給ふありけり。

はじめより、「われは」を「思ひあがり給へる御かたが
た、めなましき者におとしめそなみたまふ。おなじ程、そ
れより不願の更衣たちは、まこと、女かたのみ。」

ウエイリー

At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very high rank was favoured far beyond all the rest; so that the great ladies of the Palace, each of whom had secretly hoped that she herself would be chosen, looked with scorn and hatred upon the upstart who had dispelled their dreams. Still less were her former companions, the minor ladies of the Wardrobe, content to see her raised so far above them.

サイデンステイカー

In a certain reign there was a lady not of the first rank whom the emperor loved more than any of the others. The grand ladies with high ambitions thought her a presumptuous upstart, and lesser ladies

were still more resentful.

タイラー

In a certain reign (whose can it have been?) someone of no very great rank, among all His Majesty's Consorts and Intimates, enjoyed exceptional favor. Those others who had always assumed that pride of place was properly theirs despised her as a dreadful woman, while the lesser Intimates were unhappier still.

いかがであるか。

まず驚くのは量の格差、なかなしく、ウエイリーとサイデンステイカーとの量の格差である。ウエイリーは九十四語、サイデンステイカーは四十一語と半分以下となっている。そして、一読すると、ウエイリーが原文をなぞっているような雰囲気を感じ出すのに対して、サイデンステイカーは原文を要約したのみとの印象を与える。確かに、ウエイリーには増幅があり、潤色がある。「めなましき者」を「彼女たちの夢をないがしろにした成り上がり者 the upstart who had dispelled their dreams」とするの、名訳とする人がいるかもしれない一方、訳しすぎとも言えなくはない。「自分たちよりはるかに引き上げられたのを見つて to see her raised so far above them」は原文にはない。

他方、サイデンステイカーは、女御も更衣も、それらの人たちがたぐなんぬことも、示さない。また、入内した時から

「われこそは」と思っていた人たちがいたという雰囲気も出し得ておらず、「おなじ程」（同格の人たち）というのも省いてある。谷崎は自分の訳の方針として、「少なくとも、原文にある字句で訳文の方にそれに該当する部分がない、というようなこととはないように」したと述べているが、そうした観点からすれば、この部分、サイデンスティーカーは落第かもしれない。この訳が出た時、ほくの非公式の英語の先生で、いまは亡きMiss Eleanor Wolfが「ウェイリー訳の方がはるかに優れている」と述べたのは、サイデンスティーカーの訳があまりにもあつからんとしているのだから、こんなはずはなかるうという、日本語をほとんど知らない人の直感だったのだろうが、それは、少なくともこの部分に限って言えば、原文と照らし合わせても正しいとの印象である。

これに対して、タイラーは五十一語、つまり、ウェイリーのおよそ五十五%の言葉数で、原文の言うことをほとんど言い得ている。落ちてゐるのは、「おなじ程」のみのようである。ひとつ、「更衣」にIntimateを当てているのはつまづく人がいるかもしれない。浅井虎夫の『女官通解』に、「更衣と名づくる所以は、天子の御衣おんぞを更かへるかによりてなり」とあるから、「親密な人」にはちがいないが、官職名の一つであれば、Intimateは適切でないように思われる。O.E.D.にはそのような意味を示していない。ただ、タイラーは官位その他で腐心しているよであるから、これはあれこれ筋合いのものではないのか

もしれない。

次に、わが友Doris Bergenが『源氏物語』における物の怪の役割を論ずる書『A Woman's Weapon: Spirit Possession in The Tale of Genji』(University of Hawaii Press, 1997)で、蘊蓄を傾けて論じた夕顔の死のところを引いてみよう。パーゲンさんは、初めはアメリカ文学を研究して博士号を取得しながら、『源氏物語』に取り憑かれ、爾来マサチューセッツ大学アマスト校で日本文学を教えているドイツ人の鬼才だが、ここでは、原文を小学館の日本古典文学全集に収める阿部秋生、秋山虔、今井源衛校注・訳のものから引く。源氏が寝入りぎまに枕元に、「いとおかしげなる女」を見て、部屋を出、宿直とといのものを起こして、戻ってくる。

帰り入りて探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつ伏し臥したり。源氏「こはなぞ、あなもの狂ほしの物怖ぢや。荒れたる所は、狐などやつものもの、人をおびやかさんとて、け恐ろしう思はするならん。まるあれば、さやうのものにはおどされじ」とて、引き起こしたまふ。右近「いとつたて、乱り心地のあしうはべれば、うつ伏し臥してはべるや。御前こそわりなく思さるらめ」と言へば、「そよ、などかうは」とて、かい探りたまふに息もせず。引き動かしたまへど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、物にけど

いわねるなめりじ、せむかたなき心地したまは。紙燭しやく持もて
参まり。右近みぎぢかも動うごくをわきにまめらねば、近ちかき御ご座ざを
引ひき寄よせし、源げん氏ぢ「なほ持もつ参まれ、」ウのたまふ。例れい
なぬじつじつ、御ご前ぜん近ぢかくもえ参まらぬじつもこわじ、手て押お
まへのほなず。源げん氏ぢ「なほ持もつ来きませ。所ところに從したがひつじつ、」と
つ、引ひき寄よせし、見たみたまへに、ただしの枕まくら上に膝ひざに思おもえし
る容貌ちゆうぼうしたる女むすめ、面おもて影かげに思おもえし、心こころを海うみえさせぬ。

ウヘーロー

He groped his way back into the room. She was lying just as he had left her; with Ukon face downwards beside her. 'What are you doing there?' he cried. 'Have you gone mad with fright? You have heard no doubt that in such lonely places as this fox-spirits sometimes try to cast a spell upon men. But, dear people, you need not fear. I have come back, and will not let such creatures harm you.' And so saying he dragged Ukon from the bed. 'Oh, Sir,' she said, 'I felt so queer and frightened that I fell flat down upon my face; and what my poor lady must be going through I dare not think.' 'Then try not to add to her fright,' said Genji, and pushing her aside, bent over the prostrate form. The girl was scarcely breathing. He touched her; she was quite limp. She did not know him.

Perhaps some accursed thing, some demon had tried to snatch her spirit away; she was so timid, so childishly helpless. The man

came with the candle. Ukon was still too frightened to move. Genji placed a screen so as to hide the bed and called the man to him. It was of course contrary to etiquette that he should serve Genji himself and he hesitated in embarrassment, not venturing even to ascend the dais. 'Come here,' said Genji impatiently; 'use your common-sense.' Reluctantly the man gave him the light, and as he held it toward the bed, he saw for a moment the figure which had stood there in his dream still hovering beside the pillow; suddenly it vanished.

サウトノスライカー

He felt his way back inside. The girl was as before, and Ukon lay face down at her side.

'What is this? You're a fool to let yourself be so frightened. Are you worried about the fox spirits that come out and play tricks in deserted houses? But you needn't worry. They won't come near me! He pulled her to her knees.

'I'm not feeling at all well. That's why I was lying down. My poor lady must be terrified.'

⁷⁵She is indeed. And I can't think why!

He reached for the girl. She was not breathing. He lifted her and she was limp in his arms. There was no sign of life. She had seemed as defenseless as a child, and no doubt some evil power had taken possession of her. He could think of nothing to do. A man came with

a torch. Ukon was not prepared to move, and Genji himself pulled up curtain frames to hide the girl.

Bring the light closer!

It was a most unusual order. Not ordinarily permitted at Genji's side, the man hesitated to cross the threshold.

Come, come, bring it here! There is a time and place for ceremony!

In the torchlight he had a fleeting glimpse of a figure by the girl's pillow. It was the woman in his dream. It faded away like an apparition in an old romance.

タートル

He went back in and felt his way to her. She still lay with Ukon prostrate beside her. What is this? Fear like yours is folly! he scolded Ukon. The empty houses, foxes and whatnot shock people by giving them a good fright yes, that is it. We will not have the likes of them threatening us as long as I am here! He made her sit up.

My lord, I was only lying that way because I feel so ill. My poor lady must be quite terrified!

Yes, but why should she . . . ? He felt her; she was not breathing. He shook her, but she was limp and obviously unconscious, and he saw helplessly that, childlike as she was, a spirit had taken her.

The hand torch came. Ukon was in no condition to move, and

Genji drew up the curtain that stood nearby.

Bring it closer! he ordered. Reluctant to approach his lord further in this crisis, the man had stopped short of entering the room. Bring it here, I tell you! Have some sense!

Now in the torchlight Genji saw at her pillow, before the apparition vanished, the woman in his dream.

この段、ひびき面白いのは、冒頭の「探る」という言葉である。源氏は部屋に「帰り入りて」とあるから、探ったのは部屋ではなく、しとねに寝ている夕顔に違いないのを、ウエイリーもサイデンステイカーも、暗い部屋を探ったようにしている。これは二人が古典的な紳士で、寝ている女をまをくるといふひびきを源氏にさせたくなかったのであるひか。

さて、訳は「せむかたなき心地したまふ」の意味をウエイリーが取り違えたらしいこと、サイデンステイカーが、最後のところを、続く「昔の物語などにはそかかることは聞け」に紛れ込ませてしまったこと、それからタイラーの in this crisis が「例ならぬこと」の訳すれば、独自の解釈に基づいているらしいことを除いて、三者に意味の上で大きな揺れはない。そこであれば、ウエイリーが二百七十一語を使っているところを、タイラーは百九十九語で、二十六%以上も少ない語数で原文をなぞりえていることに気がつく（サイデンステイカーは二百三十語を用いて、二人の中間にあたる）。もっとも、ウエイ

リーは、源氏が几帳を引き寄せた理由、紙燭を持ってきた男が躊躇した理由を優雅に説明しており、そつしたことが語数を増やす理由の一つとなることは指摘するまでもない。ちなみに、几帳の方は、サイデンスティカーも、そつ、谷崎も、説明を加えている。これは、山岸や阿部その他が頭注に回しているところだ、そのようにして考えてみると、タイラーの訳をのみ読む人は、源氏の所作の意味がとつちにはつかめないかもしれない。

とくろで、この章の題は、ウエイリーが Yugao、サイデンスティカーが Evening Faces、タイラーが Twilight Beauty としている。これは、夕顔を辞書で見ると、bottle gourd または calabash と出てくるから、これでは風情がないとの判断があったにちがいない。これは染料をよめる植物の「むらねき」が growwell、「卯の花」が deutzia とあまじ詩的でない名前だ。翻訳者を困らせるのに似ている。

ただ、夕顔は moonflower と呼ぶことも可能だ。このころ、それも避けたかったのか、二訳者ともそれぞれの手だてを使っている。すなわち、御隨身みごみづらひが源氏にその名を告げる、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはる。花の名は人めきて、かつあやしき垣根になん咲きはる」という言葉を、ウエイリーは、
 ‘They are called Yugao, ‘Evening Faces,’ said one of his servants told him; how strange to find so lovely a crowd clustering on this deserted wall!’ と、サイデンスティカーは、
 ‘The white flowers far

off yonder are known as ‘evening faces,’ he said. ‘A very human name and what a shabby place they have picked to bloom in.’
 夕 evening faces に脚注をひけ、Yugao, Lagerantia sicteraria, a kind of gourd とある。タイラーは、‘My lord, they call that white flower ‘twilight beauty.’ The name makes it sound like a lord or lady, but here it is blooming on the pitiful fence.’ と訳すが、その脚注にも、章句に加えてある題の説明でも、これが gourd とあることはおぼびにも出れない。

それは、この巻名の由来となる、夕顔が源氏に贈る歌、「心あてにそれかぞ見る白露の光そ入たる夕顔の花」についても言える。面白いのは、この歌で夕顔にたとえられているのが、この部分のヒロイン（女君）ではなく、源氏であることだが、この歌を、ウエイリーは地の文に折り込んだ。‘The flower that puzzled you was but the Yugao, strange beyond knowing in its dress of shining dew.’ と訳し、サイデンスティカーは、地の文から離して、

I think I need not ask whose face it is,

So bright, this evening face, in the shining dew.

と訳す。タイラーは、これも地の文から離して、

At a guess I see that you may indeed be he: the light silver dew

brings to clothe in loveliness a twilight beauty flower.

と、イタリックにし、センタリングにして出す。

そして、その、このように歌の訳を引いてみると、ウエイリーが歌の意味を取り違えたらしいこととは別に、源氏が夕顔の死を発見するくだりではタイラーの語数がいちばん少ないのに、歌の訳ではいちばん多くなっていることに気づく。これは当然で、タイラーは、序文において、英訳では五七五七七のシラブル数を踏襲すると宣言した上で、「このシラブル数を英訳で再現するとシラブル数の多い日本語より多くの言葉を必要とすることがしばしばある」と言っている（Observing [syllabic count] often requires more words in translation than the polysyllabic original readily supplies）。それはまさにその通りで、この歌の場合、シラブル数を揃えるために何と冗舌になっただけでなく、か、「心あてにそれかと見ぬ」を At a guess I see that you may indeed be he who is the 意味の上では正しくとも、あつめてついでに遠回しの言い方だし、「光とくたぬ」を brings to clothe in loveliness who のは、サイレンスティーカー流に言えば、ニキハキとした原文を、堪え難くも直したるいものにしてこつこつと、それから、「白露」を silver dew とするのには危険である。「白露」は『万葉集』に出てくゝから、イメーシとして古典詩歌に存在しないわけではないが、それが「露」の形姿に使われたことがあるかどうかが疑問である。タイラーはそのちひな

とは先刻承知であるつから、この短い句ですら、シラブル数揃えに選んだと考えるほかない。

そこで、最後に、タイラーが全部で七百九十五首あるとする歌の訳を、もう二つほど見るべく、「鈴虫」の章の一節を閲しよう。この章は、『源氏物語』をたなごころのように知悉した石井辰彦さんが「幽玄のきわみ」とする章で、源氏と冷泉院との対面の場を大蔵省が二千円札の図柄に使ったことから、石井さんをして「父の弟」と題する連作をものさせることになったが、この歌人にとっては痛恨のきわみであるつから、先に触れたウエイリーが省いたという第三十八章が、まさにこの「鈴虫」である。だから、ここではサイデンスティーカーとタイラーしか引けない。源氏が女三の高その他を相手に、「鈴虫の宴」を、ちうと言っている時に、冷泉院から「遊びにきませんか」と言ってくるウエイレ、原文は省く。

サイデンスティーカー

Ganji suggested that the whole night be given over to admiring the bell cricket. He had just finished his second cup of wine, however, when a message came from the Reizei emperor. Disappointed at the sudden cancellation of the palace fete, Kobaï and Shikibu no Taye had appeared at the Reizei Palace, bringing with them some of the more talented poets of the day. They had heard that Yegini and the others were at Rokujek.

^TH does not forget, the moon of the autumn night,
A corner remote from that realm above the clouds.

^TDo please come, if you have no other commitments,^f
Even though he in fact had few commitments these days and the
Reizei emperor was living in quiet retirement, Genji seldom went vis-
iting. It was said that the emperor should have found it necessary to
send for him. Despite the suddenness of the invitation he immediately
began making ready.

^Th your cloud realm the moonlight is as always,
And here we see that autumn means neglect^f

タイラー

^TLet us spend tonight honoring the bell cricket^f he said. The
wine cup had gone round twice when a message came from Retired
Emperor Reizei. The Left Grand Controller and the Commissioner of
Ceremonial, disappointed by the sudden cancellation of the music at
the palace, had arrived with a group of likeminded companions, and
His Eminence had just learned that the Commander and several others
were at Rokujex.

The expensive delicate ship

^TEven where I live, far removed from that realm high above

the clouds,
the moon still remembers me on a lovely autumn night.

‘Oh, that I might only show . . .’^f His Eminence had written.
^TAs I am, I have few claims on my time, but I hardly call on him
anymore now that he has taken up a life of quiet retirement and I am
afraid he wishes to remind me that he finds me remiss.^f Genji ex-
plained, preparing to set off despite the appearance of acting precipi-
tately.

^TYour moon as before shines aloft for all to see, high above
the clouds,
while such is this home of mine that for me autumn has
changed^f

タイラー 地の文 一三三〇
左代弁 左代弁をサイテンスティカーが

左代弁 左代弁をサイテンスティカーが Kabei としているのは、
サイテンスティカーが訳をやっている時に阿部等の校注本（第
四巻）がでて、その頭注に「柏木の弟。後の紅梅大臣」とあつ
たからかどうか。大将を夕霧としているのは、まさに夕霧だか
らだが、タイラーがそれを避けたのは、原文が人にその官職で

触れる場合にはそのようにするという方針に基づく。その夕霧などのことを「聞こしめし」たのは冷泉院のようだから、サイデンスティカーのように *high* としたのでは誤りだろう。

それから、最初の歌に続く部分の訳がサイデンスティカーとタイラーでは大幅に異なる。これは、原文に「同じくは」とある部分だが、サイデンスティカーは山岸の「ここに参らせ給へ」という傍注をそのまま採った。タイラーは、これが後撰集の「あたら夜の月と花とを同じくはあはれ知らむ人に見せばや」という阿部等の指摘を採って、それを脚注に添えている。

與謝野晶子はこの歌をそのまま訳に添えているが、谷崎は山岸と同じで、単に「同じことなら私の方で」としている。

そこで歌だが、最初のは「雲の上をかけはなれたる住みかにももの忘れせぬ秋の夜の月」で、「秋の夜の月は退位した私の住み家も忘れない」という意味、二番目のは「月影はおなじ雲井に見えながらわが宿からの秋ぞかはれる」で、「月は同じように空に見えるが、私の家のせいで、秋は変わってしまった」という意味らしい。意味らしい、というのは、ぼくには「からの」の意味がいくら注釈書をひっくり返してものみ込めないからだが、「雲井」は「内裏」の意味でもあるから、上の句は「月は内裏でも退位した後の住み家でも同じに見えるが」との意味にもとれるという。

とすれば、最初の歌のサイデンスティカーの訳は、「住みか」をなぜ *corner* としたのだらうと思うほかは、かなりストレー

トに意味を伝えている。それに対して、タイラーの訳は、意味は間違っているとは言えないだろうが、訳といわんより解釈に近い。二番目の歌のサイデンスティカーの訳は、「見えながら」の位置を置きがちがえたような感じとともに、*neglect* としたのには「秋」に「厭き」の意味を込めたことは分かってても、それが正しいのかどうか分からない。タイラーの訳は、最初の歌の訳と同じで、意味はそれだよいかもしれないが、訳ではなく解釈である。かりに日本語に直してみると、「あなたの月は以前と同じくすべての人が見ることのできるよう、雲の上に高く、高々と照っているが、私のこの家は私にとって秋が変わってしまったほどの有りさまだ」となるう。

日本の古典詩歌の英訳の分野には、他の言語の詩歌の分野と同じく、「われは」と思う人たちがたくさん居て、その全てを満足させることは不可能だろう。早い話、ことは五七五七七七という詩形をどうするかという問題から始まるのである。ふつうの学者がやるように五句から成るから五行詩とすべきか、サイデンスティカーやタイラーのように、上の句、下の句という表現があるから二行詩とすべきなのか。はたまた、シラブル数はどうすべきか。そんなことを承知で、ここでタイラーの選んだやり方は、ぼくには皮肉と映る。タイラーは、こと散文に関する限り、ウェイリーの訳の増幅や潤色を避けようとしたサイデンスティカーよりも少ない言葉数で原意をかなり正確に再現しているようなのに、歌の訳では散文におけるウェイリーよりも

奔放になる。ここでやったように翻訳の善し悪しを語数でうんぬんすることはもちろん馬鹿げている。しかし、この部分、タイラーの訳は全体をみるとサイデンスティーカーの訳より語数が多いけれども、歌二首を除くと、語数が少なくなる。

これら三つの英訳を前にして、結論のようなことが言えるだろうか。

訳の正確さでは、ウエイリーがサイデンスティーカーに凌駕されたとすれば、サイデンスティーカーはタイラーに凌駕されたといえる。サイデンスティーカーをこれまでテクストとして用い、タイラーの訳を一行一行読んだ友人の学者が、タイラーは物語の終りの方で一カ所大きな間違いを犯していると報じてきたが、ソ連名代の翻訳家 Kornei Chukovsky が言ったように、「誤りは誰でも犯す」。だが、ぼくが部分的に閲したところから言えば、タイラーは誤訳が少なく、漏れも少ない。これは、『源氏物語』のように、注釈が年々増え、他方、タイラーにとつては、ウエイリーとサイデンスティーカーの訳が存在したことからすれば、当然である。そして、ぼくのつたない英語で判断すれば、トーンやリズムや言葉遣い (diction) でも、タイラーはサイデンスティーカーを凌ぐように思う。もちろん、タイラーの歌の訳は、ぼくにとつては、その伝ではない。

それでも、既に七十年ほど前にできたウエイリーの訳は、二十五年前のサイデンスティーカーの訳と併存してきたのと同じよ

うに、新しいタイラーの訳とも平行して存在し続けるにちがいない。それは、ウエイリーの、少し古びた、いわゆる「ヴィクトリア朝の英語」の方が千年前の古典にふさわしいとして愛でる読者がい続けると思えるからだ。また、ぼくにとつては時折スタツカートを思わせるサイデンスティーカーの訳を好む人がいても不思議ではない。これは、一つには、タイラーが登場人物を官位その他で言及してあるところはそのようにする、遠回しな描写はできるだけ遠回しにする決意があるからで、それより、サイデンスティーカーの直接的な方法を好む読者がいることは、予想されてしかるべきだからだ。最新の源氏和訳者の瀬戸内寂聴は、ベストセラーになった余勢をかつてニューヨークで講演、自分は原文では特定しない行為その他の説明を訳に加えたと述べたが、そういう翻案は別にして、原文に沿って訳した結果としての晶子源氏をよしとするか、谷崎源氏をよしとするかは、読者の好みの問題であるのと同じである。

(二〇〇一年十一月二十六日)